英語・米語のことわざと日本の俚諺(りげん)との比較について

北　嶋　藤　郷

はじめに

古代の修辞家は、俚諺(りげん)を釈して、「作者なき格言なり」（A saying without an author）といった。諺は人類の知恵の結晶であり、民族の文化の濃縮されたものともいえる。短い文章の中に奥深い内容が詰め込まれている。長い歳月を経て、多くの人々の頭脳によって磨かれた巧みな表現は、最も短い文芸作品でもある。その中には、人間の諸事万端、あるいは哲学的考察までもが入っている。ギリシャの哲学者・アリストテレスは、紀元前300年代にすでに、諺を「手軽にして、受用し易きために、滅亡の悲運を免れし古智識の断片なり」と定義した。

日本人は、総じてあまり話術にたけた国民ではなく、多弁を戒め、沈黙を最大限に評価する。その文化は、「沈黙は金」（Silence is golden.）を評価し、沈黙は言葉以上に多くを語ると考えている。西洋人の「雄弁は銀」（Speech is silver.）をよしとする文化と対極的な考え方である。（「多言は銀なり、沈黙は金なり」の実際の諺の起こりは、19世紀中頃のドイツとされている。）

日本人は話す時、とりわけものを書くとき、簡潔な文章を好む。教訓を含んだ警句風なものであれば、あるほどよしとされる。それゆえに、諺や俳句が好まれるのである。

愚者は、己の思想の貧困さを隠蔽するために、多種多様な言葉を弄ぶ。真の叡智は、古くから伝えられた少ない言葉（諺）の中にこそ見出されるのである。

しかし諺を理解することは、たいへん難しい。一般的に、個々の諺の起源を求めることも難しい。難しいというよりは、特殊すぎるといったらよいのか、はっきりとしないけれど、とにかく厄介である。この厄介を乗り越えるためには、筆者の観るところでは、諺を「可能な限り歴史的な流れ」のなかに置いて理解することである。それぞれの諺の表現や主張が歴史的に秩序づけられて、在るべき位置におかれると、なるほどと理解しやすい。諺が如何なる時期に、誰によって作られたかを知ることは、観賞批判する上に重要な発言権をもつので、われわれは、常に“歴史の眼”を

忘れてはならない。とはいえ、諺はしばしば民衆の知恵として、日常生活の教訓、経験智、価値判断から自然発生的に生まれることも少なくなかったのである。人々の観察や経験によって確かめられた、忠告や警告を与える、短くてぴりっとしたスパイスがきいた言葉である。17世紀の英国の著作家ジェームズ・ハウエル曰く、ことわざは Shortness（簡短）、Sense（意義）、Salt（鹹味（かんみ））の三者（3S）をその要素とすと。人の心を刺激して、長くその記憶にとどめるためには、簡潔にして辣味（らつみ）があることを要する。例えば、「用心は鉄壁」（Forewarned, forearmed.）という英語のことわざは、頭韻を用いて機知を弄した跡もあるが、きわめて簡潔である。

諺の生い立ちに関して、紀元前から人口に膾炙された金言（aphorism）の一例をあげれば、医聖といわれる古代ギリシャのヒポクラテス（Hippocrates）の言葉に、「人生は短く 学藝は永い 好機は過ぎ去りやすく 経験は過ち多く 決断は困難である。」（“VITA BREVIS ARS LONGA OCCASIO PRAECEDS EXPERIENTIA FALLAX JUDICIUM DIFFICILE.”）がある。現在でも医学部の卒業式などで、「ヒポクラテスの誓い」が朗読されているという。

日本にも類似のことわざに、「少年老い易く学成り難し」（Art is long, life is short.）がある。上記のヒポクラテスの言葉から判断すれば、Art は、「芸術」とか「学芸」と和訳するよりも「医術」とか「技術」と訳したほうが元の意味に近いのである。

また「学問に王道なし」（There is no royal road to learning.）という諺がある。紀元前300年頃のギリシャの数学者で、「幾何学の父」と呼ばれたユークリッド（Euclid）が、時のエジプト王トレミー一世に幾何学を教えていたとき、「幾何学を学ぶに捷径はないか」と聞かれたのに対して、「幾何学に王道なし」（There is no royal road to geometry.）と答えたのが起源であるとされているが、のちに「幾何学」（geometry）よりも一般的な「学問」（learning）に変わったのである。

英語の諺は、イギリス本土に生え抜きのものもあれば、ヨーロッパ大陸から移されたものもある。古代ギリシャやローマの時代に由来する諺もあれば、聖書や文人、詩人の残した名句・名言もある。とりわけ聖書、チョーサーやシェイクスピアが、英語の諺の発展におおきな貢献をしてきた。簡潔な言葉のうちにも人情の機微にふれ、人生の真理をうがつ英語の諺は、英国国民の叡智の結晶であると断言してよいであろう。

米国ペンシルベニア州の創建者であるウイリアム・ペン（William

Penn）は、

“The wisdom of nations lies in their proverbs. Collect and learn them. They save time and speaking, and upon occasion may be the fullest and safest answers.”（国民の叡智は、諺の中にある。諺を集めて学ぶがよい。諺は時間と口数の節約ともなり、ときには、もっとも安全確実な答えとなることもある）

と述べているが、これはけだし至言といえよう。

諺の発生および定義について

森洋子著『ブリューゲル諺の世界―民衆文化を語る―』は、670頁にも及ぶ大労作である。その中の「諺の構図」から引用させていただくと、「諺はラテン語でproverbiumというが、その本来の意味はpro verbo esse（言葉の代わりにあること）である」と述べられている。

「諺は、一人がいい出し、二人でうなずき、千人が使い、万人がなるほど、と受け取って、長い年月、多くの人々の間に生きてきた教え、戒め、あてこすりをふくんだ、短い文句である」といわれている。これを定義といえば堅苦しい感もあるが、要を得て簡にその意を表現している。

鈴木棠三編『続 故事ことわざ辞典』によれば、諺の語源については、大体二通りの説がある、としている。その一つは、言(こと)の技(わざ)、すなわち物をいう技術であるところから、コトワザといったとする説である。いま一つは、本居宣長が古事記伝に述べた説で、宣長は「わざ」を単純な技術の意味にせず、信仰的な精神面から解こうとしている。すなわち、「ことは言(こと)、わざは童謡(わざうた)・禍(わざわい)・俳優(わざをぎ)などのわざと同じくて、今の世にも、神又は人の霊などの祟るを、物のわざという、是なり。」と説いている。また「人の口を仮りて、神を歌わせたものを、ワザウタといい、言わせ給うを、コトワザというなり。かかればコトワザは、本は神の心にて、世の人に言わせて、吉(よ)き凶(わる)き事を喩(さと)し給うをいいしが、転(うつ)りてはただ何となく世の中に遍(あまね)く言いならわしたる言をも言うなり。」（『古事記伝』13巻）と述べている。江戸時代の最高の国文学者が、ことわざのスピリチュアルの側面を看破したのは、きわめて慧眼である、といわざるをえない。

また折口信夫は、「伝承文藝論」（『折口信夫全集』17巻、1956）の中で、“ことわざの”定義について、「わざ」とは神様が伝えた言葉であり、神事を行うときの唱え詞の一部分を起源とする「言い慣わし」であったとする。それには、“こういふことをしなければならぬ”、或いは“こういふことをしてはならぬ”という二種のほかに、もうひとつ“何の訣だか訣ら

ないけれども、傳へなければならないと感ずる詞”があって、都合三種類のものがあった、と説いた。

藤井乙男の古典的名著『諺の研究』では、上記の本居宣長の説を踏まえたうえで、「こは神道学者として至当の見解なれども、ワザの意を神意に帰するはやや強弁たるを免れず。けだしコトワザは為業(しわざ)に対する言葉(ことわざ)にして、イイグサという程の義と見ゆ」と解している。卓見である。

御木光冶編著『類別ことわざ辞典』の緒言で、著者は、“ことわざ”に深い愛情をもちながら、諺とは何かという問題提起を鋭く説いている。

くらしの中に、滲み透り、こびりついて、いつでも、どこでも、あたりかまわず、お互いの話の中に、ひょいと飛び出して来て、潤い、あや、穴うめ、のつとめを果し、なるほど、そうだ、うまい、もっともだ、と感嘆、合点、共感をさせる力をもっている。

ここに、ことわざの渋み、こく、滋味がひそみ、それが、持ち味として考えられるのではなかろうか。

×

教え、戒め、それだけがことわざの生まれた本質的なものでなくて、封建社会において、圧へつけられた庶民の、うっぷんのはけ場としてのものが、多分に感じられるものが多くある。

そこに、あてこすりが生き、「一人がいいだし」たねらいがあると思われる。

ぼそっと語られたもの、ぽつんと吐き出された声が、多くの共感を得て、今に残り、生きて来たものにちがいない。

諺の意義および形式について

かなり古い文献の中に、熊代彦太郎編『俚諺(りげん)辞典』(金港堂、1910)がある。

この辭典の校閲者は、かの有名な作家・幸田露伴である。その序文には、次のようにある。

「賢人とは賢き日多くして賢からぬ日少き人なり。

愚人とは賢き日少くして賢からぬ日多き人なり。

凡人とは賢くもあらず賢からぬにもあらざる日多くして、時に或は賢く、時に或は賢からぬことある人なり。

賢人も實は愚人若しくは凡人たる日あり。

愚人凡人も實は賢人たる時あり。

愚人凡人其の實賢人たる時に於てたまたま道破し叫出せる短き教訓は俚

諺として世に傳へらる。」(下線は筆者)

熊代彦太郎は、「俚諺論」の中の「俚諺とは何ぞや」で、「(俚諺とは) 弘く世間に行わるる、含蓄ある短詩なり」と断言している。これを弘通、含蓄、簡潔、詩趣の4項に分けて論じている (以下は要点をまとめて記述する)。

1. 弘通：通俗に用ゐらるること、これ諺の主要素なり。我邦諺をまた世話と呼ぶ。
2. 含蓄：諺には何等かの含蓄なかるべからず。或は世態人情の微を穿ち、或は訓論教戒の意を寓せざるべからず。例へば「玉に疵」と云えば、諺としては、「をしむべきことなれど、不完全は世の常なり」などの寓意をも存するなるべし。
3. 簡潔：次に簡潔も亦諺に必要なる特筆の一なり。多くの諺は冗漫なること極めて尠し。これ、弘通上自然の必要より出でたるものならん。
4. 詩趣：最後に詩趣も亦諺の一要素たり。詩趣なきものは、諺として世俗の賞贊を價せざるを以って、やがて諺たる資格を失うべし。

また熊代彦太郎は、「諺の形式」として、下記の11項を挙げている。(本論では、例文はそれぞれ一個程度に絞った。)

1. 譬喩：禍福は糾へる縄の如し。
2. 諷喩：蓼食ふ蟲も好々。
3. 對比：田舎の學問京のひるね。
4. 擬人：一寸の蟲にも五分の魂。
5. 頭韻：ほとけほっとけ、神かまふな。
6. 脚韻：弱り目に祟り目。
7. 律語：善は急げ (5)。泣面に蜂 (7)。心の鬼が身をせめる (7—5)。長い浮世に短い命 (7—7)。(5、7、或は5—7、7—7等の調べをなせり。)
8. 漸層法：十で神童十五で才子廿過ぐればただの人。
9. 具体的表出法：三人よれば文殊の智慧。
10. 誇張法：可愛子は棒で育てろ。
11. 警句法：下さるものなら夏でも小袖。

参考までに、日本のことわざの類語とその定義を『日本国語大辞典』によって記しておこう。

ことわざ (諺)：昔から世間に広く言いならわされてきたことばで、

教訓や風刺などを含んだ短句。諺語。

格言：簡潔に人生の真理や機微を述べ、処世の訓戒となるような言葉。多くは昔の聖人、偉人、学者などが言い残したもの。金言。

金言：処世へのいましめや教えとして手本とすべき言葉。模範とすべき内容をもった言葉。名句。格言。金句。

俚諺：民間に言い伝えられてきたことわざ。

俗諺：俗間のことわざ。俚諺。

『新英和大辞典』第5版（研究社）の「類語解説」には、“ことわざ”の類を示す英単語がよくまとまっているので転載させていただく（但し付随する例文は略す）。

saying　：智恵・真実についての力強い簡潔な言いならわし。

saw　：反復使用されて陳腐になった古い素朴なsaying（まれな語）。

maxim　：経験によって得た、行為の標準として役立つ一般原則を表わしたsaying。格言。

adage　：長い間一般の人々に受け入れられてきたsaying。古諺。

proverb　：実際的な智恵を表した素朴で具体的なsaying（一般的な語）。

motto　：人生の指導原理、または行動の理想として受け入れられるmaxim。

aphorism：一般真理（原則）を具体化した簡潔なsaying。

epigram　：簡潔で機知に富んだ辛らつな陳述で、巧妙な対照によって効果をあげるもの。

次に*The Oxford Dictionary of English*（2003）からことわざに関する単語を拾ってみよう（pithyという単語の意味は、[1 髄の（ような、多い）. 2（文体が）力強い、簡潔な、含蓄のある：簡潔にして要をえた]、というような含意がある。“ことわざ”を定義するに、的確なキーワードである）。

saying　：a short, pithy, commonly known expression which generally offers advice or wisdom.

saw　：a proverb or maxim.

maxim　：a short, pithy statement expressing a general truth or rule of conduct.

adage　：a proverb or short statement expressing a general truth.

proverb　：a short, well-known pithy saying, stating a general truth or piece of advice.

motto　：a short sentence or phrase chosen as encapsulating the briefs or ideals of an individual, family, or institution.

aphorism：a pithy observation which contains a general truth.

epigram　：a pithy saying or remark expressing an idea in a clever and amusing way.・a short poem, especially a satirical one, with a witty or ingenious ending.

次に英語ことわざ表現の主な特徴と例文

・Alliteration（頭韻）Care killed the cat.（心配は身の毒。）
・Rhyme（脚韻）What can't be cured, must be endured.（直せぬものは我慢せよ。）/ Man proposes, God disposes.（計画は人にあり、成敗は神にあり。）
・Repetition（反復）Love me love my dog.（法師が憎ければ袈裟まで憎い。）
・Antithesis（対照法）Much cry, little wool.（大山鳴動鼠一匹。）
・Paradox（逆説）No news is good news.（無事に便りなし。）
・Hyperbole（誇張法）Too many cooks spoil the broth.（船頭多くして船山へ上る。）

諺の意味・解釈の反面性と多層性について

諺は時代につれて変遷する。「諺は世につれ、世は諺につれ」といえる。

・転石苔を生ぜず。（A rolling stone gathers no moss./ A tumbling stone never gathers fog. fog＝Scot. moss）

（1）イギリスは、定着社会であるので、安定性（stability）を尊ぶ。この諺は、転々と商売変えや転居を繰り返すものは、金も溜まらないし、何事も成就できない、というたとえとしてとらえられている。（2）アメリカは、移動社会であるので、流動性（mobility）を尊ぶ。転職や転居など、いつも積極的に行動している者は、苔むすような沈滞することもなく、清新でいられるというたとえとしてとらえられている。「使っている鍬（くわ）は光る」という諺もアメリカ式である（＝A rolling stone gathers no moss but picks up a high polish.）。

現代の日本では、どのようにこの諺を解釈してきたか。戦前の日本は、農村型の社会であったから、長男は土地にも家にもしばりつけられていた。娘たちは近隣に嫁ぎ、土地を離れることのできた次男坊や三男坊でも

終身雇用制という安定性を好んだ。あちらこちらへコロコロと転職するような者は、同じ所に居られなくなった流れ者であり、社会はそういう放浪者を信用しなかった。ところが戦後、日本社会が大きく変化するとともに、旧式な固定観念が崩れてきたのである。農村の人々が競って都会を目指し、人口の流動は激しい。現在の日本では、年配者はイギリス流に、年齢が若くなるにつれて、アメリカ流の考え方が増えているのではなかろうか。

京都の苔寺や法然寺、また道頓堀の法善寺横丁の水かけ不動尊のように、苔むすことを尊ぶ気風は、日本古来の風習のなかにあった。わが国歌は、『古今和歌集』の中にある、「我が君は千代に八千代にさざれ石の巌(いわお)となりて苔のむすまで」を下敷きにしたものである。細かい石がやがて巌となって、そこに苔が生えるまでという、悠久の時間の流れを感じる和歌である。

古来日本人は、苔を美しいと思う感覚を発達させてきた。美しい苔は、湿度の高いところでないと育たない。イギリスでも庭園を造って苔を植え、大切に育てているのを見かける。イギリスの権威ある辞書にも、moss（苔）とは、金のことなり、と出ているほどで、職業や住居を転々とかえるような人は金が溜まらない、というのが最初の解釈であり、比喩的には恋愛についても同じことがいえる。ところがアメリカ人は、これを誤解して、「動いていれば苔がつかず新鮮である」と真逆の意味にとってしまったのである。「苔のつかないこと」を逆にいい意味にとって、転職などを肯定的に考える解釈をしたのである。たしかにアメリカの西部の不毛地帯の荒野（badlands）などには、苔は育ちにくいだろうし、似合わない。むしろ陰湿で不活発な連想すら伴うのかもしれない。

「ことわざの解釈は、ひとりひとりの考え方や価値観によって決定される。日ごろは自覚しないものの見方、感じ方をあぶり出して見せてくれる。そう考えると、玉虫色のことわざは、ときとしてロールシャッハ・テストのようになる」と外山滋比古氏は、『ことわざの論理』の中で述べている。この諺は、漢語的な言い回しなので、中国伝来のもののようであるが、実は出典は、W. Langland の『農夫ピアズの夢』（*Piers Plowman*, 1362）である。

・犬もあるけば棒にあたる（The dog that trots about finds a bone.)。

江戸時代に編まれた、『譬喩尽(たとへづくし)』（松葉軒東井編）には、「狗も歩行(あるき)けば棒に遇(あ)う」とある。

江戸式歌留多の「い」の句として有名であるが、まったく相反する意味を持つ珍しいことわざの一つである。(1) 幸運説「何かをやっていれば以外な幸運に出会うこと。」藤井乙男編『諺語大辭典』では、The scraping hen will get something, the crouching hen nothing. A flying crow always catches something. —Dutch. とある。(2) 災難説「何か行動すると災難に遭遇すること。」現代では、もともと災難であったものが幸運に転じたという見解が多い。ところが最近では、(3) 石を投げればなんとかに当たるという言い回しと同義のもので、幸・不幸は問題ではなく、「ただ単に対象となるものに遭遇する。」の意の用法もある(『岩波ことわざ辞典』参照)。

熊代彦太郎編『俚諺辭典』では、「事を為すもの禍にあふことありとの義。又奔走する際思ひもよらず好事に出逢ふことに用ふ。」と解釈してある。

また他の諺に、「下手な鉄砲数打ちゃ当たる」や西洋には、"He who shoots often, hits at last."があるが、上記の (3) の意味と比較考量して、「中(あた)らずと雖(いえど)も遠からず」か。また、「人間(じんかん)至る処に青山(せいざん)あり」もある(人間(じんかん)=世の中、青山(せいざん)=骨を埋める所)。

寓話からきたことわざについて

寓話は教訓を目的とした短い物語で、おもに擬人化された動物が活躍する。古代ギリシャに源流があるが、イソップが道徳的、風刺的主題をもつ物語として確立した。近世には、ラ・フォンテーヌが伝統的主題に詩と哲学的議論と英知を盛り込んで、寓話を偉大な詩のジャンルにまで高めた。

・熟れていない葡萄(Those Grapes are sour.)。

手許にあるFables of La Fontaine (Chartwell Books) には、Gustave Doréの見事な挿絵が320枚ついた、479頁の豪華本である。その中の有名な"Fox and the Grapes"の英訳を引用してみよう(文中の下線は筆者)。

A certain hungry Fox, of Gascon breed
(Or Norman—but the difference is small),
Discovered, looking very ripe indeed,
  Some Grapes that hung upon an orchard-wall.
Striving to clamber up and seize the prey,
  He found the fruit was not within his power;
"Well, well," he muttered, as he walked away,

"It's my conviction that those Grapes are sour."

The Fox did wisely to accept his lot;
'Twas better than complaining, was it not?

Jack Zipes (ed.) *Aesop's Fables* (Signet Classics) の最後の2行を引用すると、下記のように結んである。

"Well, what does it matter anyway? The grapes are sour!"
It is easy to despise what you can not get.

「手が届けば食べたはずなのに、手が届かないのでぶどうにけちをつけた狐のイソップの寓話に由来する」と『英語諺事典』には解説してある。

・もうはまだなり、まだはもうなり (Depend upon yourself alone.)。

この諺は、株式売買の諺であり、人間の心理をよく衝いている。『ラ・フォンテーヌ寓話集』の中の "The Lark and her little Ones with the Owner of a Field" の話の展開によく似ている。ある麦畑に巣を掛けている雲雀(ひばり)親子は、近く麦刈人が畑に入るのが気がかりである。「もうそろそろ巣立ってもよいのではないのかい」と雛鳥たちは落着かない。母鳥は「まだまだ時期尚早であるから、もう少し待ちましょう」と答える。『イソップ寓話集』では、Self-help is the best help. という結論を導きだしている。つまり、しっかり自分の目で周囲の状況を確かめてから判断せよ、ということを語っている。

・負けて勝つ (Slow and steady win the race.)。

『ラ・フォンテーヌ寓話集』や『イソップ寓話集』では、"The Hare and the Tortoise" の物語の中で、「のろくても着実なのが競争に勝つ」「負けるが勝ち」という結論を導き出している。急ぐときに急いではならない。むしろゆっくり構えたほうがよい。蛇足になるが、兎と亀の競争には、審判が必要であり、狐 (fox) がコースとゴールを決定し、審判をつとめる。審判は風のように走る兎に伴走できるだけの能力がなくてはならない。レースの途中でうたたねをした兎が、飛び起きて、ねぼけまなこで目標とは反対方向にでも逆走したりすれば、なまじ足が早いだけに厄介で、審判もそのあとを追わなければならない。ごく足の早い兎と、ごく足の遅い亀が競走する時、狡猾な狐を審判として、ユーモラスで、ずっこけた仕掛けがあって、このおとぎ話のおもしろさを支えている。

・悠々として急げ (Festina lente)。

これは寓話ではないが、"Festina lente!" (フェステイナ・レンテ) とは、オーガスタス・シーザーの言葉として、はなはだ有名である。「ゆっ

くり急げ」（Make haste slowly.）の意味である。“Hasten slowly.”（急がば回れ）は、14世紀後期にできた諺とされている。二つのことが互いにぶつかり合う、一見矛盾する言葉を結びつけて、一面の真理を伝えるのを修辞学では撞着矛盾（オキシモロン）という。撞着矛盾には、辻褄が合わない所があり、論理の飛躍がありで、この語法はかなり洒落たものである。しかし言外の言葉を理解すれば、なんとも言えない諧謔味がある。また江戸時代（天明6年）に発刊された『譬喩尽』には、「急ぎの文章は静かに書け」が盛られている。わが開高 健の著書にも『悠々として急げ』がある。

英文学に現われたことわざについて

・簡潔は智恵の真髄（Brevity is the soul of wit.）。

文学作品が長い生命を持つためには、いくつかの条件が必要なわけであるが、シェイクスピアの場合、その条件のなかには、コールリッジがシェイクスピアを形容した有名な言葉である“myriad-minded”（万魂）も当然入っているであろう。“myriad-minded Shakespeare”は、「あらゆる事に通じた心のシェイクスピア」というほどの意味であろう。ロンドンで初めて『ハムレット』を観劇したある老婦人が、「シェイクスピアの作品は、私のよく知る諺や名言・名句ばかりで成り立っているのね」と感嘆したという逸話を想起してしまうのである。

シェイクスピアの悲劇『ハムレット』（第2幕、第2場）で、ポローニアスの台詞に、「由来簡潔は智恵の真髄」（三神勲訳）というのが出てくる。簡単にいえば、「王子殿下は狂気にわたらせられる」と述べている。

本来ことわざは口承文芸であるから、いつの時代に成立したものか特定できないものが多い。「簡潔は智恵の真髄」のように、初めて文献にのった時代から起算して推測するよりほかはないのである。したがって諺は、シェイクスピアが作ったものではないが、彼が世に広めた諺である、ということができよう。

「英語の諺・格言・名句集」の中で、シェイクスピアの数の多さは歴然としている。これはシェイクスピアが古来の諺や格言を好んでいたため、また彼自身が名句をつくることを楽しみにしていたためでもある。もうひとつシェイクスピアがイギリスの詩人作家の中で他にぬきんでているのは、誰よりも頻繁に聖書の言葉を使っていることである。聖書が金言のおおきなみなもとであることは、誰も否定するものではないが、シェイクスピアは聖書の中の言葉を、自家薬籠中のものとして馴染みきっていて、ほ

とんどそれとわからないような形で作品のなかに導入しているのである。シェイクスピアは自分を「取るに足りないものにパッと飛びつく者」と称していたといわれているが、彼は青年のころから、森羅万象の現象に好奇心が溢れる眼差しを注いでいた。

・脆き者よ、お前の名は女（Frailty, thy name is woman!)。

王子ハムレットの第一独白にある有名な句。貞操観念のない母親の行動を見て、怒りを通りこして嫌悪感すら感じている王子は、やり場のない鬱積を吐露している。女性である母親が脆いものであるがゆえに、女性一般が脆い、といっているのだ（*Hamlet, I. ii.*)。

・覚悟がすべて（The readiness is all.)。

シェイクスピア一流の簡潔な言葉である。ハムレットは、レアーティーズから剣術の試合を申し込まれる。お気が進まぬなら、おやめになっては、と忠告する友人のホレーショーに、聖書の言葉を引用し、「雀一羽落ちるにも特別な神の摂理がある」（There is special providence in the fall of a sparrow.）といい、「覚悟が肝心」である、と答える場面である（*Hamlet, V. ii.*)。

・あとは沈黙（The rest is silence.)。

有名なハムレットの臨終の言葉。ハムレット王子は、短い一生の最後に、一言そういって事切れるのである（*Hamlet, V. ii.*)。

・無からは無しか生まれてこないぞ（Nothing will come of nothing.)。

老齢のリヤ王は、三人の娘たちに王国を三分して、国譲りをしようとする。ゴネリルとリーガンという上二人の娘は、美辞麗句をもって父親を賛美する。末娘のコーディリーアは、王のお気に入りだ。が、「陛下、何も」（“Nothing, my lord.”）という返答がかえってくる。狼狽した王は、「何もないところから何も出てこないぞ。言い直しなさい」（斎藤勇訳）と末娘にせまる。彼女の虚飾をそぎ落した簡潔さは、王の衝撃の大きさを物語っている。これはまさに、「沈黙は金」の手法なのである（*King Lear, I. i.*)。

・覚悟が肝要だ（Ripeness is all.)。

リア王とコーディリーアの連合軍が敗れ、二人が捕らわれの身となったことを知ったグロスター伯（式部長官）は、荒野のその場でのたれ死にしたいものだ、という。嫡子エドガーは、「覚悟をもって、時が熟すのを待つしかありません」とグロスター伯を諫めている（*King Lear, V. ii.*)。

B.フランクリンのことわざについて

米国の建国時代のベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-90）は、多彩な人（many-sided man）であり、『貧しいリチャードの歴』（*Poor Richard's Almanack*）を残した。当時のアメリカは農業中心の社会であり、種播きや収穫の時季、月の満ち欠け、潮の満ち引き、病気の手当て、人生の教訓といったような、生活に必要な情報をたっぷりと盛った暦は、バイブルと共に一家に一冊は備えられていた。フランクリンは、貧しいリチャードという架空の人物を作って、その人が作った暦ということにした。リチャードはヤンキーの雛型のような人物で、たいへん現実的で、抜け目がない。しかしどこか人がよくて、ユーモラスで、少々ずっこけたところもある。そういう人物にふさわしい表現内容をふんだんに盛った暦で、特に評判になったのは格言（ことわざ）であった。以下いくつかの有名な例文を挙げておきたい。

・時は金なり（Time is money.）。

熊代彦太郎編『俚諺辭典補遺』では、時間の貴きをいう例として、蘇東坡の詩から、「一刻千金」を引用している。「西洋の諺に時は金なり time is money とあるを取れるならん」とある。「一寸の光陰軽んずべからず」同様に、日本では精神論的に受け取られがちである。

・神は自ら助くる者を助く。(God helps them that help themselves.)

God help those who help themselves. の例文のhelpに“s”が付いていないのは、叙想法の願望をあらわす語法である、と筆者は高校時代に習った。

フランクリンは、“s”を付けて、人は勤勉力行すれば、必ず神が助けてくれる、という現実の格言としてしまったのである。

・今日できることを明日まで延すな（Never put off until tomorrow what you can do today.）。

伝親鸞作の和歌に、「明日ありと思う心の仇桜夜半に嵐の吹かむものかは」がある。ある有名英語雑誌の編集長が、「思い立ったが吉日」（There is no time like the present.）といって、飲み会に出かける部下に、小遣いを渡す場面を筆者は目撃したことがある。

・魚と来客は3日も経つと匂を発す（Fish and visitors smell in three days.）。

お盆には、可愛い孫たちが実家に里帰りしてくる。初日は大歓迎するが、3日も経つと、「孫は来て良し、行って良し」（越後の諺）となる。類例に、「客と白鷺は立ったが見事」がある。

・勤勉は幸運の母なり（Diligence is the Mother of Good-luck.）。

スイフトの『ガリバー旅行記』（1726）に、Necessity is mother of invention. があるから、フランクリンはこれを応用したか。

日本固有のことわざ

・俳諧に古人なし。

「和歌に師匠なし」といふに倣うて、芭蕉が唱え出したるが、遂に諺となりしなり。俳句を詠ずるには、別に師を以て得べからず。要は唯古句をよみて、自特するに在りとの意（熊代彦太郎編『俚諺辭典』参照）。また『詠歌大概』には、「和歌に師匠なし、ただ古歌を以て師となす」とある。

・一富士、二鷹、三茄子。

熊代彦太郎編『俚諺辭典』には、「吉夢の次第をいふ。一説に、駿河の国の名物をいふといへり。一富士、二鷹、三茄子、四扇、五多波姑、六座頭」とある。

特に新年の初夢について、夢にみると縁起がよいとされるものの順番。静岡県中部にあたる駿河の名物をあげたもの。江戸時代の浮世絵にたくさん見られ、絵の題は、「初夢」「夢見」となっている。明治時代の引札は、商品の広告や売出し披露を扱った札で、初夢の図柄は引札の定番であった、という。引札は、今日の宣伝用のチラシにあたる。

「晴れてよし曇りてもよし富士の山 もとの姿はかわらざりけり」という山岡鉄舟の名筆がある。

鷹狩りは、杉山英昭著『古典聚影』によれば、当時優れた先進文明の土地である百済からもたらされた。鷹を用いて、禽獣などの小さき獲物を捕える猟法である。鷹狩りは豪華なスポーツで、平安時代から特に貴族に好まれた。『伊勢物語』の初段は、初冠してとあるから、成人式をすませたばかりの17歳ぐらいの若さの匂いたつような青年が登場する。この青年は右腕に幾重にも皮革をまいて、そこに精悍な面構えの鷹を止まらせ、自身は馬上豊かな出で立ちである。「野をわたる風、馬のいななき、青年の汗、野をとよもす勢子の声。それらが聴覚や皮膚感覚として、壮快につたわってくる初段である」と杉山氏は論述している。

茄子は駿河の名産であると同時に「ナスは物事を成す」の縁起をかつぐのであろう。毎年、農家の畑に茄子の花が咲く頃になると、「親の意見と茄子の花は千に一つも徒がない」と祖母が言っていたのを想いだす。

また會津八朔郎の句に〈ぬか味噌の茄子紫に今朝の秋〉がある。色鮮やかに染まっているぬか味噌の茄子。涼気立つと漬け上がりの茄子の色がよ

くなるという。ああ今日はもう立秋なのだな。この句の主題は、立秋を迎えた嬉しさを詠んでいる。ことのほか鮮やかな紫色の十全ナスや水ナスの浅漬けは、立秋（8月8日）の朝の食卓に出されると絶品である。

・夜目遠目笠の内。

夜の薄暗がり、遠くからみた時、そして菅笠をかぶっていている時などは、人の顔が実際よりきれいに見える時に使う言葉。「笠」を「傘」とみる見方もある。

鎌倉・室町時代から、傘は上層階級に使われており、江戸時代に庶民に普及した。

「目をとめよ梅かながめん夜目遠目」（『毛吹草』）

「つき山の石燈籠の夜目遠目かさの中こそをくゆかしけれ」（『吾吟我集』）

・鳥なき里の蝙蝠。

優れたものがいないところで、つまらない者が幅を利かせることのたとえ。江戸時代末期の俳諧師・小林一茶の句に、「蝙蝠や鳥なき里の飯時分」がある。言うまでもなく「鳥なき里の蝙蝠」という諺を踏まえた句詠である。詩的な表現形式をとっている諺は、江戸時代の俳諧師にとって、俳句の素材としても注目された。

・桃栗3年柿8年、柚子（ゆず）の大馬鹿13年。

これはそれぞれの果実のなるまでの年数をいったもの。単に“ユズ13年”では語呂が悪い。なにをぐずぐずしているのか、この間抜けめ、という心をこめて、“ユズの大馬鹿13年”とやる。軽快であり、ユーモラスであり、ことわざの面白さを支えている。また、「桃栗3年柿8年、梅は酸いとて13年」（熊代彦太郎編『俚諺辭典』）もある。園芸学の知識もこういった形式で表現すると覚えやすく忘れられない。越後には、「梨の馬鹿めが18年」という諺がある。中間に莫迦（バカ）が入った諺に、「桜切るバカ、梅切らぬバカ」がある。

越後固有の諺

・親を睨（にら）むと鰈（かれい）になるぞ（親を睨むと鰈の目になる）。

初めに江戸時代末期の禅僧良寛の8、9歳ごろの名高い逸話、「幼時の良寛親を睨む」から始めよう。谷川敏朗著『良寛の生涯と逸話』からの引用であるが、幼い頃の良寛すなわち栄蔵は叱られると、上目で人の顔をじっと見る癖があった。ある日遅く起きて父親に叱られ、いつものように上目でじっと見た。日頃気にしていた父親は、「親を睨むと鰈になるぞ」といった。栄蔵の姿は家から見えなくなった。日が暮れても帰らないので家

族は心配し、心当たりを探したが見つからない。もしかしたら海岸ではあるまいか、と母親が行ってみると栄蔵は海辺の近くの岩の上に、しょんぼりしゃがみ込んで海を見つめていた。ホッとした母親が、栄蔵に「こんなところで何をしているのだね」と声をかけると栄蔵は、「おれはまだ鰈になっていないかえ」と言った。

須佐晋長の「良寛の一生」には、越後子守唄として「鰈かわいや背中に目鼻、親をにらんだそのばちだ」というのが記されている。当時そのような唄が、出雲崎地方にも歌われていたものであろうか。

父母に孝順ならしむるための諺が日本には多い。「親を睨むと」は「親に反抗すると」と同義であり、「鰈になる」は、「次の世に鰈に生まれる」ということである。芭蕉門下の宝井其角の句に、「親にらむ平目を踏んで汐干かな」がある。

そして、たとえどんな親でも敬えといい、親のすることはたとえ間違っていても、子はそれに従うのが親孝行なのである。「打つも撫(な)でるも親の恩」や「馬鹿な親でも親は親」「親物に狂わば子は噺(はや)すべし」などがある。「子を持って知る親の恩」(He that has no children knows not what love is.) は、いかにも日本的な諺といえようが、英語にも同じようなものがある。親と月夜はいつ見てもよいものである。有名な川柳『誹風柳多留』に、「孝行のしたい時分に親はなし」があるが、親のありがたさや親の恩に関する諺は、日本には非常に多いが、英語には非常に少なく、聖書の中に若干垣間見る程度である。

「神をあがめ両親を敬え」(Honor the gods reverence parents.) はその一例である。

・頼のまれれば越後からでも餅つきに。

人情に厚い越後人を言った諺。「頼めば信州からでも米春(つき)にも来る」(熊代彦太郎編『俚諺辭典』) もある。

・新潟にては杉と男はたたぬ。

新潟平野の砂丘地帯には松が多く杉はあまり見かけない。男の意気地なさをそれに掛けていったもの。熊代彦太郎編『俚諺辭典』では、「新潟にては杉育たず又女の勢力の甚だしき地故、男はたたぬとなり」とある。

・越後女に上州(じょうしゅう)男。

熊代彦太郎編『俚諺辭典』では、「越後の女は美にして、上州の男は意気なりとの義」と解説している。

・新潟は八百八後家(ごけ)。

熊代彦太郎編『俚諺辭典』では、「新潟は寡婦多しとの義」とある。こ

の『俚諺辭典』は、発刊より一世紀以上を経ているので、今日この諺が当てはまるか否か、詳らかではない。

・赤犬(あかいぬ)が狐を追う。

熊代彦太郎編『俚諺辭典補遺』に、「新潟地方にて言う諺なり。彼是優劣のなきこと、畢竟同じ類にて区別なしとの義ならむ、赤犬の毛色は狐の毛色に似たるものなり、追ふもの、追わるるのもと相似たりとの意」とある。

・柿が赤うなれや、医者が青うなる（川上賢吉編『佐渡俚諺集』増補参考、s.6)。

柿はビタミンなど栄養豊富な果物で、「柿喰すれば風邪ひかず」と言われた。柿の実の赤色と医者の顔色の対比が妙である。

「蜜柑の皮が色付(いろづく)と藪医の顔が青(あを)なる」(『譬喩尽(たとへづくし)』）や、「枇杷(びわ)が黄色くなると医者が忙(せ)はしくなる」もあるが、初夏のころは病人が多くなる由。

・腐れ柿がずくし柿を笑う。

つまらない者同志がお互いに嘲笑し合うこと。また完熟と腐敗の区別のつかない愚か者の意にもなる。「熟(う)み瓜が熟(う)み柿を笑う」とも。*ずくし…熟した意。同類のものに、「眼糞鼻糞を笑う」「猿の尻笑い」らがある。

・雁の中にドーまじり。

ひときわ目立つ存在という意。類諺に、「雑喉(ざこ)のトト交り」がある。

*ドー…鴇(とき)（越後の方言で、大雪は「ドーユキ」） *トト…魚

・金北山の種蒔き猿。

佐渡の諺。積雪がようやく溶けて、岩角現われその形が猿に似たるにいう。同類の諺に、「駒形山の白馬と種蒔き」がある。

また川口孫治郎著『自然歴』（日新書院）には、「梨の花咲きゃ栗を蒔け」「藤の花が咲き始めると稗を蒔かねばならぬ」などが載っている。

・言わば語らば浄瑠璃(じょうるり)平家。

古浄瑠璃人形芝居の説教節や文弥節など、佐渡で盛んであった語りものをひきあいに出した諺で、つらさ悲しさを感じ、切ないときに言う（佐渡、両津)。

・打つも舞うも一人でする。

遠流の地としても歴史を持つ佐渡には、世阿弥をはじめ、政争に敗れた多くの貴族や文化人が配流された。能楽の盛んな佐渡らしい諺。*打つ…太鼓や鼓などを打つこと。

・佐渡にないものは狐と盗人。

能狂言『佐渡狐』にあるように、佐渡では狢(むじな)が幅を利かせて、狐を島か

ら追い出した。

・佐渡の付き合い倒れ。

佐渡では、交際費で貧乏になる意。「京の着倒れ、大阪の食い倒れ」などと同類の諺。

・羽茂(はもち)太郎久地(くじ)次郎。

佐渡産の白米の美味しさを競った諺で、南部郷の羽茂に軍配を上げている（『高志(こしじ)路』303号（s.10）参照）。

・佐渡は一度行かぬ馬鹿、二度行く馬鹿。

承久の乱によって、流され人となった順徳上皇などの歴史や文化、江戸時代の金銀山の発掘跡、それに海岸線がきわめて美しいので、一生に一度は旅するべきであろうというほどの意。「一度見ぬ馬鹿、二度見る馬鹿」のもじりか。

・ふんどしに棒つきのいる佐渡の山。

佐渡の金山では、褌一つの鉱夫にも6尺棒を突いた監視役人がいた。「もしやもしやともしやもしやと」（『誹風柳多留』）。

・佐渡の山検使(けんし)の前でぶらつかせ。

金鉱の着服を防ぐための厳重な監視を、滑稽に誇張したうがち。「あきらかな事あきらかな事」（『誹風柳多留』）。

・強いものマッカーサーにオッカサー。

戦後日本を占領した連合軍総司令官マッカーサー元帥の名前が入っているから、太平洋戦争後に、越後で生まれたことわざであろう（上越地方の諺）。

・南無三宝。（聖徳太子十七条憲法（二）参照）

(1) 仏・法・僧の三宝に呼び掛け、仏の救いを求めるときに唱える語。
(2) 驚いたとき、失敗したときなどに発する語。

ブッポウソウは、いわゆる姿のブッポウソウであり、越後の方言では、“サンポウ”、“モンツキドリ”などと呼ばれている。飛んだ時に両翼に白く紋付の模様がみえる。これは諺ではないが、越後の人々が「三宝」（仏・法・僧）として、弘智法印の時代から、この野鳥を大事にしてきた。

題弘智法印像	良寛（弘智法印の像を見て詩を作る）
粼皴烏藤朽夜雨	粼皴(りんしゅん)たる烏藤は 夜雨に朽ち
襴衫袈裟化暁烟	襴衫(らんさん)と袈裟(けさ)は暁烟(ぎょうえん)に化す
誰知此老真面目	誰(たれ)か知らん 此の老の真面目
画図松風千古伝	画図(がと)の松風 千古に伝う

木の肌に皺が流れるような黒く古びた杖は、夜ごとの雨に打たれて朽ち果て、単衣の衣も袈裟も朝もやにぬれて薄切れをおこしている。このような法印の真の精神は、誰が理解できようか。ただ法印が詠んだ辞世の歌、「墨絵に描きし松風の音」によって、千年の末まで伝えられるであろう。

弘智法印は下総の人。新潟県寺泊野積で“ブッポウソウ”（三法）の鳴き声を聞き居を定めた。貞治二年（1363）に死亡。日本最古の即身仏として、野積の西生寺に安置されている。弘智法印の辞世に、「岩坂の主（あるじ）は誰ぞと人問わば墨絵に描きし松風の音」がある。良寛詩は、清貧の生活を送り、衆生の罪を負って即身成仏した弘智法印の徳を賞讃したものである。越後では法印像が木版刷で配布されている（西郡久吾著『北越偉人沙門良寛全伝』参照）。

いろは歌留多

「いろは歌留多」は、「ことわざ撰集」のようなものである。人口に膾炙し、浸透していくためには、諺の調子のよさが大切で、ほとんどあらゆる語呂が活用されている。字数だけでなく、数字のおもしろさを出した諺もある。

次に、「いろは歌留多」の「い」を例にとってみよう。

い「上方式」石の上にも三年（7－4）

い「江戸式」犬も歩けば棒に当たる（7－5）

い「中京式」一を聞いて十を知る（6－5）

語呂のよさがなくては、庶民の頭の中に入りにくい。頭の中で、いつまでも忘れないためには、調子のよさはきわめて重要な要素である。日本語のリズムは、ことわざの中にも脈々として生き続けている。書き言葉では、7―5調、5―7調のものばかり重用してきた日本人であるが、ことわざの中に奏でられるさまざまな変化のあるリズムの中にこそ、市井の人々の知恵がひそんでいるのではあるまいか。それを下世話なものとして、莫迦にしてきた知識人は、本当に賢人であったであろうか。

「いろは歌留多」によって、諺は民衆の生活感情のなかに溶け込み、思想の底に潜み込んでいき、今日まで、民衆の日常の智恵や訓えとなって、いきいきと伝わって来たものであると思えるのである。その「いろは歌留多」は、はじめ京におこって畿内から関東へ伝わり、徐々に全国に広がっていったものである。全国に伝播していくうちに、地方的な変化がおきて、いろいろなものが生まれたが、代表的なものには、「上方式」、「江戸式」、「中京式」があるが、現在においては、「江戸式」が一般的に行われて

いるようである。

京は公家（くげ）の町、大阪は町人の町、それぞれに持味がある。江戸の文化は武家の存在を外しては考えられない。同じ物尺（ものさし）で計っては狂いが出る。江戸は武家を中心に競い立つ新興寄合いの町である。武家集団に付随して、多くの人間が諸国から雲集して、武蔵野にでき上がった新しい町だ。士農工商入り交って生きる、いわばごった煮のような町が、伝統を創り、独特の持味が出てくるまでには、長い年月を要した。

今回はあえて、「越後式」と呼んでもよいかもしれないが、禅僧良寛の生活や詩歌のなかから、「良寛さんいろは歌留多」を編んでみた。解良栄重著『良寛師奇話』（1847）をも参照した。（拙稿「歌留多の読み札」の完成後に、小川文夫作「良寛かるた」があることを良寛研究家の星野淳雄氏からご教示を得た）

「良寛さんいろは歌留多」

い	一に石を曳き、二に土を搬ぶ	（円通寺の家風）
ろ	老朽夢覚め易し	
は	花開時蝶来 蝶来時花開	
に	濁る世を澄めともいわず谷川の水	
ほ	ほろ酔いの足元軽し春の風	（以南）
へ	平生の身持にほしや風呂上がり	
と	訪う人もなき山里の庵に住んで独り月を眺める	
ち	散る桜残る桜も散る桜	
り	良や愚のごとく道うたた寛し	（国仙の印可の偈）
ぬ	盗人（ぬすびと）にとり残されし窓の月	
る	留守の戸に独り淋しき散り松葉	
を	親を睨（にら）むと鰥（かれい）になるぞ	（以南）
わ	吾が宿は竹の柱に菰すだれ	（五合庵）
か	形見とて 何残すらむ 春は花	（辞世の歌）
よ	欲無ければ一切足り 求むる有れば万事窮（きわ）まる	
た	焚くほどは風がもてくる落葉かな	
れ	憐花迷柳浣花渓（かんかけい）	（杜甫子美像）
そ	僧可は清貧を可とする	
つ	月よみの光を待ちて帰りませ	
ね	寝ころんで虫干し一切経	
な	鍋蓋に心月輪（しんげつりん）	

ら　襤褸又襤褸 襤褸是生涯
む　村の子供と良寛様は日暮れ忘れてかくれんぼ　（岩室甚句）
う　雲水修行（行雲流水）
ゐ　いざさらば暑さを忘れ盆踊り
の　のっぽりと師走も知らず弥彦山
お　「おかの戒語」は家庭円満の秘訣
く　くるに似て かへるに似たり おきつ波　（貞心尼）
や　山里は蛙の声となりにけり
ま　真昼中ほろりほろりと芥子の花
け　敬上憐下（戒語）
ふ　風鈴や竹を去ること三四尺
こ　この里に手毬つきつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし
え　えにしあらばまたも住みなん森の下庵
て　天寒自愛（維馨尼宛て手簡）
あ　愛語ヨク廻天の力アルコトヲオ学スベキナリ　（愛語）
さ　索々たり五合庵
き　君来ませいが栗落ちし道よけて
ゆ　悠然と草の枕に秋の庵
め　面壁九年は達磨大師
み　水の面にあや織りみだる春の雨
し　生涯身を立つるに懶く 騰々として天眞に任す
ゑ　縁の下の筍　（逸話）
ひ　一二三 いろは
も　紅葉葉の錦の秋や唐衣
せ　禪掃除、眞言料理、門徒花、盛物法華
す　須磨寺の昔を問えば山桜
京　京の道元、越後の良寛

おわりに

「簡潔こそ知恵の精髄」（Brevity is the soul of wit.）とは、シェイクスピアの言葉である。『旧約聖書』の「箴言」（Proverbs）には、ソロモン王の知恵と訓戒の言葉が鏤められている。

ラテン語のproverbiumの語源は、「共通の言葉」という意味であり、諺には、人生経験や世間智などを踏まえた教訓や風刺の意味を含む簡潔で、社会常識を示すものが多い。諺はその国の民衆から生まれた、ということ

が重要なファクターである。

米国の建国の父祖のひとりである、B.フランクリンの諺である「時は金なり」（Time is money.）などは、最少限の言葉で、真実を的確に言い当てている。時の持つ神秘性は失われたかも知れないが、この時代の合理主義と資本主義が見事に合体した表現である。

このたび、『ことわざに聞く―その魅力と威力―』の日本ことわざ文化学会長・森 洋子氏の“まえがき”「始めよければ終りよし」（All's well that ends well.）を読んで圧倒される思いがあった。（沙翁（しゃおう）は深く俚諺（りげん）を愛し、無数の諺を曲中に応用した。*All'Well That Ends Well*のみならず、*Measure for Measure*.（「しっぺがえし」）のごとき普通の俚諺を外題（げだい）に代えた。）

この学会は、2009年の秋に創立され、2010年11月27日に一周年記念を迎えた。その会員は、国内外の研究者・教育者はもとより、出版人、公務員、会社員、講座の講師、医師・看護師、僧侶、音楽家、主婦、大学院生、学生などから成り、間口の広い「ことわざの広場」を構えて、職業や世代を問わず「民衆の知恵の宝庫」を学ぼうとする大衆に開かれた学会なのである。

上記の書物の内容は、I部「芝居（ことわざ）は一日（一時）の早学問―ことわざと歴史」、II部「見かけは単純『花より団子』―ことわざ理論」、III部「仏の心凡夫知らず―仏教とことわざ」、IV部「よく遊び、よく学べ―教育とことわざ」、V部「所かわれど諺変わらず―ことわざと比較文化」、VI部「身から出た『ことわざ』―創作ことわざ」の6部からなり、各部には、2～3の章立てのある構成となっている。文学、比較文化学、図像学、教育学、音楽学、宗教学、社会学、心理学、当世風創作諺などを取り扱った、博覧強記で、きわめて学術的で盛りだくさんな内容であり、日本国の諺学のみならず、国際諺学会にも大きな貢献をするものであると確信する。

嘱目すべきは、V部11章の「ピーテル・ブリューゲルの＜ネーデルラントの諺＞と古い日本の諺画―図像比較試論」（森 洋子）である。ブリューゲルの「悪魔をクッションの上で縛る女」と、江戸末期の諧謔に富む河鍋狂斎の戯画、「亭主を尻に敷く」とを一例に挙げて、比較してみよう。

前者は、豪気な主婦の恐ろしさを強調した諺だ。キリスト教世界で、もっとも恐れられている存在の悪魔が、腕っ節の強そうで、顎のでばった、意地悪な主婦に押さえ込まれている。彼は顔を真っ赤にしながら、無抵抗の状態で、気の強い女房に降参した亭主のようでもある。

後者は、「肩や胸を露出し、だらしない格好の妻が夫の上に馬乗りをして、一方の手で夫の頭を押さえ、もう一方の手で煙管をもち、悠然とタバコを吸っている。夫は左手の肘を箱枕の上に載せ、その手で煙草盆をもち、妻の喫煙の便をはかっている。それだけでなく両足の上に器用に煙草箱を載せ、妻の命じる方向に箱を移動させる。妻に仕える、お人好しの夫に対し、彼女は『のろまやろう』という煙文字を吐いている」。(pp.271-72)

看過してならないのは、ブリューゲルの描く悪魔は、完膚無きまでに打擲され、情けない表情であるが、狂斎の描く亭主の表情は、やにさがっていて、このような状況を楽しんでいるようだ。なにやらにやけた亭主の様子からして、“短気は損気。急がば廻れ”と、これから紅灯の巷に繰り出す好機を伺う、下心も見え隠れする。夫婦は「合わせもの離れもの」(All things fit not all persons.)というが、彼のその表情からして、かかあ天下の亭主(henpecked husband)の面目躍然たるものがある。

森氏によれば、ブリューゲルの作品では、図像表現によっていかに道徳教訓的なメッセージで民衆を教化するのが眼目であるのに対して、江戸時代の諺画はどこかユーモラスであり、見るものを楽しませ、強烈な教訓を避けている、と結論づけている。庶民の知恵である諺は、それぞれの国の社会や民族に固有な面を映し出しつつも、このように符号するのは、人間に共通する普遍的な心理があるかであろう、と思われる。

諺の比較考察は昔からあった。しかしブリューゲルの<盲人の寓話>と歌川豊国の<座頭の一つ橋>/ブリューゲルの<鯰の尻尾を掴む>と広渡作三郎の<瓢箪鯰>(諺には、「鰻に荷鞍」もある)/ブリューゲルの<豚の前に薔薇を撒く>と歌川国芳の<猫に小判>/そしてブリューゲルの<夫に青いマントを着せる>と河鍋狂斎の<亭主の顔へ泥をぬる>などの図像表現による比較文化の手法は、わが国では勿論、外国においても初めての試み、といえるであろう。

その他、3章「ことわざからみた『論語』」(穴田義孝)、5章「ことわざ概念と隣接分野との区分を巡って」(時田昌瑞)、7章「仏教ことわざの解釈法」(勝崎裕彦)、10章「絵双六にみる庶民の教育観」(伊藤久恵)、14章「からだことわざ」(山口政信)等々の独特の切り口の論攷は、それぞれ興味深く熟読し、裨益するとろが大であった。

また本書は、ことわざから戊辰戦争を考察したり、禅の諺、諺教育と子供、明治時代の諺、そして創作ことわざまで、さながら諺の万華鏡をのぞくようで、諺のもつ魅力(charm)や威力(power)に魅了された。一

般読者も諺の果実を味わえるのはありがたいし、これを学校教育にも活用して欲しいと思う。

諺はその時代の民衆から生まれ、時代と共に消え去るものもある。時の篩にかけられる諺に、「籠に乗る人担ぐ人そのまた草鞋作る人」がある。人の身分や職業はさまざまで、いろいろな人々の繋がりで世間は成り立っている、という意味だ。ところが、最近の歴女（れきじょ）といわれる若い女性たちの戦国武将ブームもあって、“マゲメン”が人気となり、廃れるどころか、この諺はしたたかに生き続けるかもしれない、と思っている。だからこそ諺は面白い。

「赤信号みんなで渡ればこわくない」は、いわいる伝統的な諺ではないが、付和雷同の群衆心理をあざやかに捉えた現代諺の傑作であろう。「多数のうちのひとりであるほうが、少数のひとりであるより安全だ」という気持をおかしく表現した。旧約聖書の「箴言」にも、There is safety in numbers. がある。

（「おわりに」の部分は、参考文献（19）に記した、書評『ことわざに聞く―その魅力と威力―』の拙稿に加筆したものである。）

参考文献

[1] 外国で出版されたもの

（1） W. G. Smith & F. P. Wilson, *The Oxford Dictionary of Proverbs*（Oxford Univ. Press, 1980）この大部な「諺辞書」のp.628には、"Pity is akin to love."が盛り込まれている。わが漱石はある作品の中で、「可哀想だた惚れたつて事よ」と訳した。蓋し名訳であるが、ローレンス・スターン作『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見』（*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*）からの引用とされている。

（2） V. H. Collins, *A Book of English Proverbs with Origins and Explanations*（Longmans, 1959）.

（3） R. Ridout & C. Witting, *English Proverbs Explained*（Heinemann, 1967）.

（4） Evan Esar（ed.）, *The Dictionary of Humorous Quotations*（Horizon Press, 1949）.

（5） *The Bible*: Revised Standard Version, containing *The Old & New Testaments*（The World Publishing Company, 1962）.

（6） A. Bierce, *The Devil's Dictionary*（Dover, 1993）.

（7） *Esar's Comic Dictionary*（Harvest House, 1943）.

（8） *The Autobiography of Benjamin Franklin*（Dover, 1996）.

（9） B. Franklin, *Poor Richard Almanack*（Steve Martin, 2000）.

（10） *Fables of La Fontaine*（Chartwell Books, 1982）.

（11） Jack Zipes（ed.）, *Aesop's Fables*（Signet Classics, 1992）.

[2] 日本で出版されたもの

（1） 日本ことわざ文化学会編『ことわざに聞く』人間の科学社（2010）

（2） 鈴木棠三編『続 故事ことわざ辞典』東京堂（1978）

（3） 井上義昌『英米故事伝説事典』冨山房（1991）

（4） 岩田一男編訳『英語ユーモア事典』研究社（1975）

（5） 山本忠尚編『日英比較 ことわざ事典』創元社（2007）

（6） 秋本弘介『英語のことわざ』創元社（2004）

（7） P.ミルワード『英語の名句・名言』講談社現代新書（1998）

（8） 佐々木功監修『英語のことわざ集』中経出版（2009）

（9） 牧野高吉『英語でこう言う日本語の慣用表現』講談社＋α新書（2003）

（10） 奥津文夫『ことわざで英語を学ぶ』三修社（2008）

（11） 奥津文夫『英語のことわざ・日本語のことわざ』サイマル出版会（1978）

（12） 奥津文夫『日英ことわざの比較文化』大修館書店（2000）

（13） 郡司外史『謎解 笑辞苑』開拓社（1981）

（14） 大塚高信／高瀬省三編『英語諺事典』三省堂（1978）

（15） 時田昌瑞『図説 日本のことわざ』河出書房新社（1999）

（16） 外山滋比古『ことわざの論理』筑摩書房（2008）

（17） 外山滋比古『ユーモアのレッスン』中公新書（2007）

（18） 板垣俊一編著『新潟県の＜ことわざ＞』新潟県立女子短期大学（2006）

（19） 北嶋藤郷「学際的、比較文化的アプローチのことわざ研究論集」（『ことわざに聞く―その魅力と威力』の書評）未来社（『未来』（2011年3月号）

（20） 西川正身編訳『悪魔の辞典』岩波書店（1995）

（21） H.コリス『米語のことわざ101』マクミラン ランゲージハウス（2001）

（22） 御木光冶編『類別ことわざ辞典』文信堂（1981）

(23) 高宮感斎『俚諺通解』朗月堂（1898）
(24) 勝俣銓吉郎『英和対訳俚諺金言集』（袖珍本）有朋堂（1902 ）
(25) 英国ヘンリー・ジ・ボーン『英和對譯 泰西俚諺集』大鵬館（1888）
(26) 熊代彦太郎編『俚諺辭典』（金港堂、1910）
(27) 松葉軒東井編『譬喩尽』（天明6（1786）年版）
(28) 藤井乙男『諺の研究』（講談社学術文庫、1978）
(29) 新村出『毛吹草』（岩波文庫、1944）初版は寛永15（1638）年.
(30) 曾根田憲三／K.アンダーソン『英語ことわざ用法辞典』大学書林（1987）
(31) 川口孫治郎『自然歴』日新書院（1943）
(32) 宮田正信校注『誹風柳多留』新潮社（1985）
(33) 玉川一郎編『末摘花』芳賀書店（1967）
(34) 細川謙二『俚諺讀本』厚生閣（1936）
(35) 太田全斎『諺苑』養徳社（1944）
(36) 小島 嶽『英語の諺』研究社（1941）
(37) 坪内逍遥監修『俚諺大辭典』東方書院（1933）
(38) 藤井乙男編『諺語大辭典』有朋堂（1925）
(39) 戸田　豊『現代英語ことわざ辞典』リーベル出版（2004）
(40) 北村孝一・武田勝昭編『英語常用ことわざ辞典』東京堂（1997）
(41) 野本拓夫編『ことわざと故事・名言分類辞典』法学書院（2008）
(42) 掘田郷弘「バスクのことわざ」『銅鑼』60（2011.12.）

正誤表（errata）
『敬和学園大学　研究紀要』第20号（2011.2.11発行）「大愚良寛から會津八一へ」p.69
誤
Scent of a thousand years' history,
white wisteria under the eaves
of Chūgūji nunnery. (trans. by Haue Aoki)
正
scent of
a thousand years' history,
white wisteria
under the eaves
of Chuguji nunnery　　（青木春枝訳）
参考文献
One Hundred Tanka of Byakuren Yanagihara 柳原白蓮の百首　青木春枝訳
発行所　七月堂（2010年8月1日）引用箇所　90頁